

知られざる絆

会津と御坊

寄贈された会津藩士、山川浩ゆかりの品。福島県会津若松市で



戊辰戦争敗走の藩士 中野家が看護

福島県会津若松市に16日、会津藩士で「会津の知将」と称された山川浩（1845～1898年）ゆかりの品が寄贈された。戊辰戦争勃発の一戦となった1868年の鳥羽伏見の戦いの敗走中、熱病にかかった山川を手厚く看護した御坊市の中野家が所有していた資料で、会津若松市の担当者は「会津藩士が苦勞して江戸の会津藩邸に帰還したことを具体的に表す貴重な資料」と評価している。【湯浅聖一】

資料を会津若松市に寄贈

山川は会津藩で家老を務めた山川家の長男。若くして家督を継ぎ、藩主・松平容保が京都守護職就任に伴って上洛した。戊辰戦争後は斗南藩で大参事となり、その後は陸軍少将、貴族院議員を経て98年には男爵に叙せられた。

戊辰戦争の鳥羽伏見の戦いでは、会津藩を率いたものの、敗れて退却。藩士約1800人とともに紀州に落ち延び、小松原村（現・御坊市）にたどり着いたところで熱病にかかった。当時、紀州藩からは敗走兵をかくまわないように通達が出されていたが、中吉旅館の主人・中野吉右衛門の母でおかみのおこうが献身的に看護し、命を救われて江戸の藩邸に帰った。

寄贈された資料は、山川が明



会津藩士の山川浩
—会津武家屋敷提供

会津若松市教委文化課の近藤真佐夫主幹は「会津藩が戊辰戦争で『賊軍』と言われたにもかかわらず、親身になって世話や交流を続けてくれたことに感謝したい。山川の資料は地元でも少ないので、今後資料を分析したい」と話した。